HP 掲載用

研修報告書　№29

所　属：国立国際医療センター
研修先：嶺北中央病院

この度、令和 7 年 12 月に 1 ヶ月間、町立国保嶺北中央病院で地域医療研修を行いましたので、報告します。

○県外在住医師から見た高知の地域医療の状況

私は普段、都市部の急性期病院で勤務していますが、今回、高知県嶺北地域という中山間地域での医療に従事し、その地理的環境と医療アクセスの課題に直面しました。嶺北地域は四国山脈の中央に位置し、高知市内の高次医療機関までは車で約 1 時間という距離があります。公共交通機関も限られているため、自家用車を運転できない高齢者にとって通院自体が高いハードルとなっている現状を目の当たりにしました。高知県は全国に先駆けて高齢化が進んでおり、外来や病棟で担当した患者さんの多くは後期高齢者であり、心不全や認知症、整形外科疾患など複数の慢性疾患を抱えながら生活しています。このような環境下において、嶺北中央病院は地域唯一の公立病院として、救急から慢性期医療、在宅医療までを包括的に担っていました。医療の偏在や医師不足といった課題は知識として持っていましたが、実際に地域住民の生活の場に身を置くことで、地域医療を支えるネットワークの重要性を肌で感じることができました。

○研修内容に対する意見

4 週間の研修期間中、病棟診療や内科外来に加え、訪問診療、診療所外来、予防接種業務、さらには左鼠径ヘルニアに対するメッシュ・プラグ法の手術助手など、多岐にわたる業務を経験することができました。特筆すべきは、自習時間が確保されており、自分が興味を持ったことについて掘り下げて学べる環境が整っていた点です。担当した症例について文献を調べたり、指導医の先生方に質問したりする時間が十分にあり、主体的に学びを深めることができました。

また、地域医療というと慢性期管理や内科的対応に目が行きがちですが、地域で完結できる外科的治療を提供することの意義も学びました。リソースが限られた診療所外来で、効率よく患者さんの満足度を下げずに診療を行う点については、指導医の先生方から多くの示唆を受けました。

○今回の臨床研修で得たと考えられるもの

本研修を通じて得られた最大の収穫は、生活の場としての医療という視点を獲得できた

ことです。私が所属する急性期病院では疾患の治療が最優先され、退院後の生活についてのフォローは分業として他の施設に依頼することが多くありました。

しかし、地域包括ケア病棟や療養型病床を有する施設での研修を通じ、高度急性期病院からの転院後、患者さんがどのように療養生活へ移行し普段の生活に戻っていくのか、あるいは人生の最期までをどう過ごすのかという一連の流れを体感することができました。具体的には、ADL 低下を背景とした褥瘡治療や、認知症を伴う肺化膿症、末期肺癌に対する緩和治療などを担当しました。治療方針を決定する際、医学的な介入だけでなく、患者さんの家族構成、家屋環境、介護力といった社会的背景を考慮することが不可欠でした。NST 回診やリハビリテーションカンファレンスに参加し、医師、看護師、理学療法士、管理栄養士らが患者さんの長期的な QOL 維持を最優先にしたアプローチを模索する姿に、チーム医療の意義を実感しました。

今後どのような専門分野に進んでも、今回学んだ生活者の視点と多職種連携の重要性を常に意識し、患者さん一人ひとりの人生に寄り添える医師でありたいと考えています。最後に、ご指導いただいた先生方、嶺北中央病院のスタッフの皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。